

ニシマカジキ 大西洋

White Marlin, *Tetrapturus albidus*



管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

生物学的特性

■最大体長・体重：下顎叉長 205 cm・67 kg

■寿命：不明

■成熟開始年齢：不明

■産卵期・産卵場：春、熱帯域

■索餌期・索餌場：夏、温帯域

■食性：おそらく魚類、イカ類

■捕食者：大型歯鯨類、マグロ・カジキ類等が小型個体を捕食すると考えられる。

※2006年に本種に外見がよく似たラウンドスケールスピアフィッシュが新種として記載された。これ以前に行われた本種の生物学的研究には、ラウンドスケールスピアフィッシュの標本が混入していると考えられる。

利用・用途

刺身、寿司、切り身（ステーキ）、マリネ等

漁業の特徴

本種を主対象として漁獲している漁業は米国、ベネズエラ、バハマ、ブラジル等のスポーツフィッシングとカリブ海諸国やアフリカ西岸諸国の沿岸零細漁業であるが、漁獲量の大部分は台湾、日本、ブラジル等のはえ縄漁業の混獲によるものである。近年、ベネズエラ、トリニダード・トバゴ等のカリブ海諸国やブラジルの零細漁業の漁獲の割合が多い。最近本種に外見が極めてよく似たラウンドスケールスピアフィッシュ (Roundscale Spearfish, *Tetrapturus georgii*) という新種の存在が確認され、ニシマカジキの報告漁獲量の中に本種の漁獲が含まれていることがわかった。現在までのところ ICCAT のニシマカジキの漁獲統計はこの 2 種を一緒に計上している。

漁獲の動向

本種の漁獲の大半ははえ縄漁業によるものであり、1980年代半ば以降は南大西洋での漁獲が、北大西洋を上回っていたが、2010年からは北大西洋の漁獲量がやや多くなっている。本種の総漁獲量は1960年代に約5,000トンまで達した後、1970年代に2,000トン前後に急減し、2000年までの間に1,000~2,000トンの間で推移した。その後総漁獲量は緩やかな減少傾向を示し、2009年までは600トン前後で推移したが、2010年以降再び減少し、2018年は暫定値で304トンと報告されている。日本の漁獲量は、1990年代前半までは100トンを上回っていたが、それ以降減少を続け、近年の漁獲量は6~10トンであり、2018年は8トンであった。

資源状態

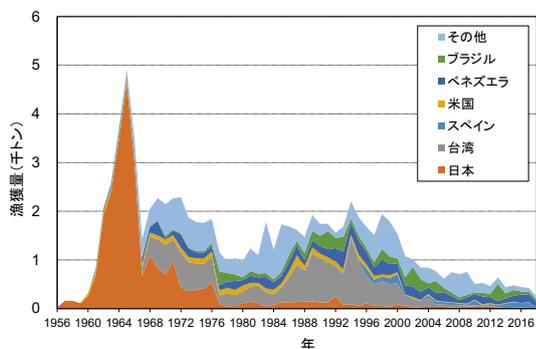
資源解析はベイジアンプロダクションモデル (JABBA) と統合モデル (SS3) を用いて実施された。漁獲量に対する不確実性を反映するために、SS3を用いた解析では、投棄・放流をモデル内で推定するシナリオ (モデル6) と、提出された漁獲データのみを使用するシナリオ (モデル7) が使用された。資源評価の結果、本資源はこれまで高い漁獲圧を受けてきたが、現在は漁獲圧も減少し、現在の漁獲死亡係数の水準は最大持続生産量 (MSY) レベルよりも低くなっている。一方、資源量はいまだに MSY レベルよりも低くなっていると考えられる。以上の結果から、資源量は、MSY を下回っている可能性があるものの、漁獲量は減少しているため、資源水準は低位、資源動向は増加と判断される。

管理方策

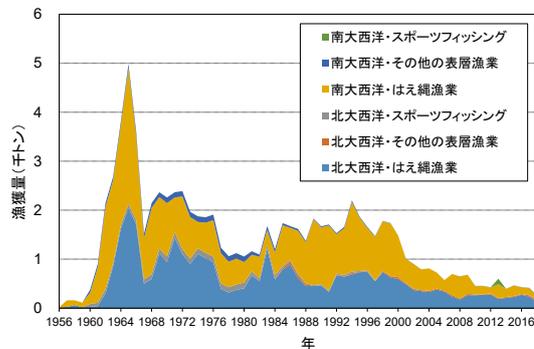
2019年に行われた資源評価結果を受けて、大西洋のニシマカジキ資源に対しては、2020年以降の毎年の陸揚げ限度量を355トンとすることが合意された。日本の割当量は年間35トンである。また、生きて漁獲された個体をできるだけ放流後の生存率が高くなるように放流することが勧告されたほか、資源解析・評価の実施に当たって問題となった生存放流及び死亡投棄個体数の各国の推定方法の SCRS による検証、スポーツフィッシングについてはオブザーバーの乗船 (カバー率5%)、サイズ規制と売買の禁止が勧告されている。なお、2020年の年次会合は、新型コロナウイルスの影響のため中止となり、管理方策は更新されていない。

| ニシマカジキ（大西洋）の資源の現況（要約表） | |
|------------------------|--|
| 資源水準 | 低位 |
| 資源動向 | 増加 |
| 世界の漁獲量* (最近5年間) | 247~480トン 最近(2018)年:247トン 平均:405トン(2014~2018年) |
| 我が国の漁獲量* (最近5年間) | 6~10トン 最近(2018)年:8トン 平均:8トン(2014~2018年) |
| 管理目標 | MSY |
| 資源評価の方法 | JABBA 及び SS3 |
| 資源の状態 | $B_{2017} < B_{MSY}$ $F_{2017} < F_{MSY}$ |
| 管理措置 | 2020年以降の陸揚げ限度量を355トンとする(日本の割当量は35トン)。 スポーツフィッシングについてオフザバー乗船(5%)、サイズ規制、漁獲物の売買禁止。 |
| 最新の資源評価年 | 2019年 |
| 次回の資源評価年 | 2025年 |

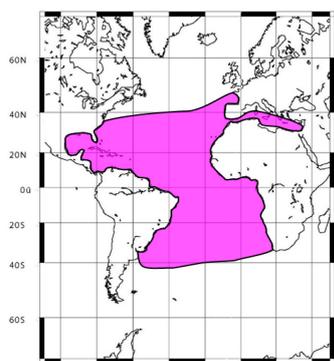
* 漁獲量には、いずれもラウンドスケールスピアフィッシュの漁獲が混入していると考えられる。



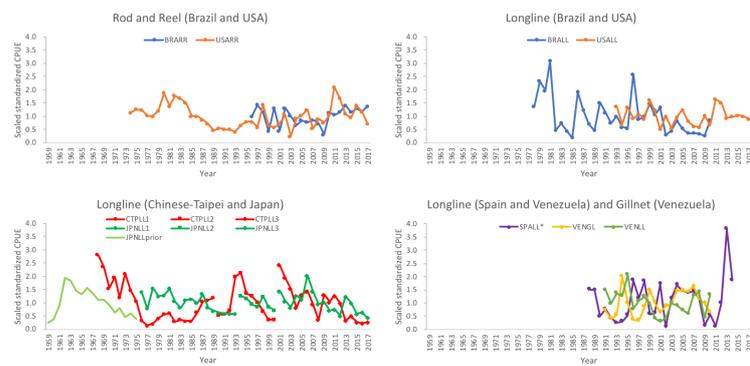
ニシマカジキの国別漁獲量 (1956~2018年)



ニシマカジキの海域別・漁法別漁獲量 (1956~2018年)

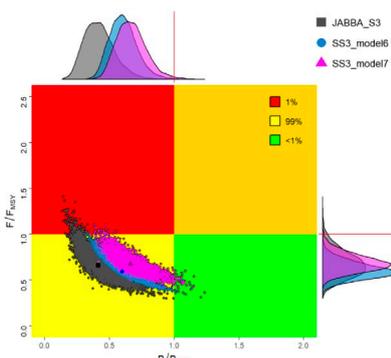


ニシマカジキの分布



資源評価で用いられた漁業別資源量指数

EU スペインのはえ縄の指標(紫色実線)は、感度解析のみに使用された。また、JABBAのベースケースモデル(モデルS3)は、1959-1961年の日本のはえ縄CPUEを使用していない。



資源評価結果(神戸プロット)

資源評価の結果として、JABBAのS3モデル(1959年から1974年までの日本のはえ縄CPUEを使用していないモデル)とSS3のモデル6(放棄した漁獲をモデル内で推定した結果)及びモデル7(放棄した漁獲を推定していない結果)が合意された。本資源は、資源量は乱獲状態にあるものの、漁獲圧は基準値(F_{MSY})を下回っており、乱獲は発生していない。